

日高山脈、神威岳&ペテガリ岳

【山城】北海道、日高山脈

【ルート】神威岳&ペテガリ岳

【登山方法】ハイキング

【メンバー】単独

【行動日】6/23～6/27

【内容】

6/23 東京駅 6:32 北海道新幹線⇒新函館⇒苫小牧駅レンタカー14:20⇒日高高速道⇒日高厚賀 IC⇒荻伏⇒元浦川林道⇒18:45 神威山荘（泊）

去年は、直前に元浦川林道が通行止めになり、日高の山を断念して道南の山を登った。今回、この林道を走って、路肩の崩れそうな所や、落石が多くあり、何時閉鎖になってもおかしくないように思えたが、未舗装ながら、普通車で乗り込めた。神威山荘の手前で、ペテガリ岳への渡渉地点を下見し、神威山荘に明るいうちに到着できほっとする。車が3台、駐車してあったが、山荘は、人の気配なく、今宵は独りだった。

6/24（ガス、夕方晴）神威山荘 4:45－尾根取り付き 8:05/8:20－神威岳山頂 10:35/10:45－尾根取り付き 12:16/12:35－神威山荘 14:10（泊）

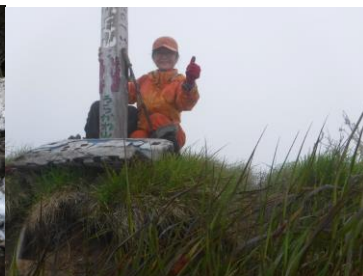
朝方の雷と雨音で、今日の早出は無理と思い、今日中に、神威岳登頂後のペテガリ山荘への移動は断念した。雨もやみ、渡渉地点の水量は、昨日とあまり変わらないので出発する。ニシュオマナイ川を右岸に渡り、伐採道を 440m の二俣まで歩き、この後何度か、渡渉を繰り返して、遡行する。途中、洪水で木々がなぎ倒された場所では、左岸の巻き道に、ピンクテープがあるもの踏み跡のない笹に突入するが、かなりの苦戦の末、踏み跡に交わる。復路は、この場所で、苦労した記憶がないので、うまい具合にピンクテープに導かれ歩いたのだろう。720m の二俣を過ぎ、雪渓上を歩き、尾根の取り付きになった。沢靴をデポして、急登ながら、快適に登り 1000m 辺りから、ますますガスが濃くなる。景色は望めないが、足元のお花が、露に濡れ生き生きしている。標高を上げ、ハイマツやナナカマドを掻き分けるようになると、山頂の気配がしてくる。



ニシュオマナイ川渡渉



雪渓



神威岳山頂

ガスの中に山頂の標柱らしきものが浮かんできた。山が何も見えないのは残念で仕方ないが、三年越しに神威岳山頂に立てた事はうれしい。ガスは晴れそうもないので早々に下山する。ハイマツ帯を過ぎると、登りでは、あまり気にならなかった急斜面を、後ろ向きになった

り、笹にぶら下がったりして下る。ダテカンバと笹波の中に咲く、ウコンウツギがとても綺麗！雪溪が見えてきたら、間もなく尾根取り付き点だ。靴を履き替え、沢の下降になる。立ち木がなぎ倒され、倒木の山積み等、荒れた沢を目の当たりにすると、自然の猛威の恐ろしさを感じる。



渡渉の合間の踏み跡や、目印のピンクテープも、水に流され倒木に交じっている。こんな場所を、ピンクテープを見つけながら、自分で、歩きやすい所を探し、渡りやすい所を進むのも楽しめる。渡渉は、水量が少ない時は、飛び石で登山靴でも登れるかも知れないが、今回は、登山靴では、到底進めない水量だった。往路で膝下、復路では、膝上と水位は上がっていた。雪溪の雪解けなのか？伐採道を下って、ニシュオマナイ川を渡渉し神威山荘に到着。明日、神威岳に登ると言う男性二人がくつろいでいた。今日中に、ペテガリ山荘迄、移動しようか迷ったが、時間の余裕もなく不安だったので、予定通り明日の早朝発にして、寛いだ。

6/25 (曇り、濃霧) 神威山荘 3:30ーニシュオマナイ川渡渉 3:50ーペテガリ山荘 7:55/8:20ー1050mP9:15/9:30ーペテガリ岳山頂 13:41/13:59ー1191mP14:49ー1050mP16:50/17:05ーペテガリ山荘 18:36 (泊)

しとしと雨で目覚めるが、雨脚次第でペテガリ岳をあきらめる覚悟で、朝食を済ませ、とりあえず、渡渉地点近くに移動した。空が明るくなり雨も止んだので計画通り決行する。ニシュオマナイ川の渡渉は、沢靴なので問題なく渡る。林道歩きから、沢を詰め急斜面の泥壁を、トラロープや笹にぶら下がりながらの峠越えをして、4.8キロの林道歩きで、ようやくペテガリ岳登山口だ。ベツピリガイ沢を渡り登山靴に履き替え、沢靴をデポして、ペテガリ山荘へと林道を進む。山荘に泊りの荷物をデポしに立ち寄りびっくりした。トイレ、台所には、電灯がつき、室内は綺麗で暖炉もあった。



登山口にて、入林届けに記載し、沢沿いから尾根道に取り付く。トドマツの人工林を九十九折に高度を上げ、尾根上へと進む。1050mのピークで休憩、西から南方面の展望はあったが、これから進む先はガスで見えないので磁石を合わせ進む。これから、先は、いくつものピークを越え、ダケカンバの中、深い笹を掻き分け進む。



ガスの中に浮かぶ次のピーク



ダケカンバとチシマザサの海

痩せ尾根で足元が見えるとホッとするが、東の間！展望がないので、目の前のピークがボート浮かび上がってくると下って、また登る繰り返し、濡れた笹波を進むのが辛くなる。笹を掻き分けると踏み跡はしっかりあるが、展望がないため、不安は膨れ上がるので、現在地を把握し、磁石をまめに合わせる。1293mのピークを越え、少し緩やかに尾根を下り始めた時、異常な笹音に足が止まる。笹を吹いたり、鈴をやたら鳴らし、しばらくようすをみてから進むと、笹丈の低い登山道に子熊の物と思われる落とし物があった。しばらく、笹を吹きながら進む。帰りに、また、別の場所にも、同じような落とし物があった。遭遇しなくて良かった！！この近辺は、地図上に沼のある処で、クマが、出没するところらしい。1191m、1301m辺りのピークは、間違っているのではと思うくらい長く感じ辛かったが、一番辛いのは、この先一度下ってから 500m を登り上げることを認識してる。タイムリミットは、14 時と決めていたので、ここまで来て敗退したくないと思ったら、急に力が湧いて夢中で最低鞍部から、笹を漕ぎ上を目指した。



ハイマツとナナカマドを掻き分けて



遠い山頂

ペテガリ岳山頂

成長したハイマツや、ナナカマドを漕ぎ始めた時、男性二人組に会い励まされ、いよいよ

よピッチを上げた。・・・が、そこから先、山頂は遠く感じた。あれが頂き？っと、何度思ったことか・・・知床半島の敗退が頭をよぎる。13時を過ぎた。少しガスが薄くなりハイマツの丈も低くなったように思える。そして、また、元気になり、30分後、頂らしきが、ガスの中にボート浮かんで見えた。やった！とどいた！感激で一杯なのに足の進みが悪い。ようやく山頂に立てた！・・・何も見えない。殆ど休憩していなかったのでお腹が空いた！大休止して、エネルギーを補給した。展望は無くても、感情の袋が張り裂けそうな大満足で一杯。暫く山頂をうろたえ写真を撮って山頂を後にする。下り始める頃になって、ガスが薄くなり、岩の上に載ってみると、登って来た長い稜線が見えるようになった。笹のトンネルの急斜面を一気に下り、もくもくと歩いた稜線に出ると、振り返り振り返り、写真に収め、脳裏に収めて、アップダウンを繰り返しつつ下る。



ガスが晴れてきた！



奥の凹から降りてきた

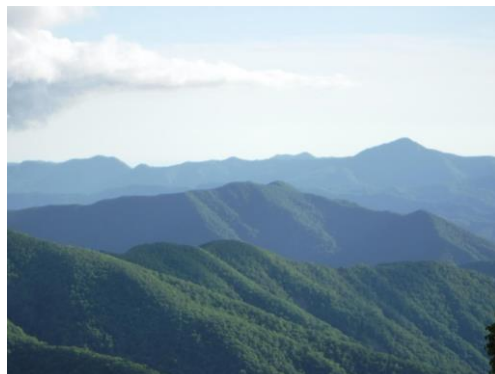


ガスの際の稜線を 500m 下る



振り返る

振り返り頂までの辿った長大な稜線を眺め、またもや感動の波が押し寄せる。1259m ピーク辺りでは、北日高の山波が見え、1839 峰と思われる山も見えた。



ようやく見えたペテガリ岳

北日高方面、右が、1839 峰

南に延びる稜線に、中ノ岳から神威岳方面も見えるほど、天気は回復していた。心が安らぐと、景色も変わって見えてくる。終着の尾根が谷に下り、目の前のダテカンバと笹の稜線がとても綺麗に見えた。今日は、山荘泊りなので、名残惜しみながら、トドマツ林に差し込む夕陽の中を下る。今宵は、日高の山奥の山荘に独り。今日山頂直下で出会った男性二人組は、帰ったようだ。

6/26 (曇り) ペテガリ山荘 4:35—林道—峠越え—ニシュオマナイ川渡渉 8:20—駐車地地点⇒みついし温泉 (泊)

朝、山荘前で一匹の鹿に見送られ、峠を目指す。比較的新しい落し物が幾つもあった。デポした、沢靴に履き替え、ピンクテープを追って進んだ。昨日、下った沢沿いとルートが違っていたが、何れ沢に入る。こちらの方が、近道だったように感じた。泥壁を登り、下って、ニシュオマナイ川で、ドロドロのカップや靴を洗って、駐車地点に戻る。おわった！早く温泉に入りたい！みついし温泉にナビをセットして、元浦川林道を慎重に下り、みついし温泉に向かった。温泉に入り、海鮮男ラーメンを食べた。おいしかった！至福の時を過ごしたのも束の間、夜の天気予報で日高地方は、未明から雷、大雨の予報に、山や林道から、脱出は容易ではないので、今ここにいる事にほっとすると同時に、明日の帰路が心配になりながらも、久々の快適なベッドで爆睡した。

6/27 (雨) みついし温泉 7:30⇒厚賀 IC 日高高速道⇒苫小牧駅レンタカー9:40⇒苫小牧駅 10:17⇒北海道新幹線⇒東京駅⇒帰路

朝食を済ませ早々に宿を出る。苫小牧に近づく頃、強い雨が降り出したが、苫小牧駅でレンタカーを返し、特急北斗から北海道新幹線に乗継帰路に着く。途中、秋田新幹線は、大雨で運休になっていた。

4泊5日で日高の山を二山登って来た。神威岳の沢は、一昨年台風で随分荒れていた。ペテガリ岳の往路は、稜線に登り上げてから、チシマザサを掻き分けて、アップダウンの繰り返して、汗をかいていたので、ズボン、着ていたが、上着の合羽を着ていなかった。身体の芯まで濡れてくると、寒くなり、低体温になる前に、カップをきた。この後、身体

も暖まり、復路では、カッパの下の衣類もすっかり乾いた。衣類が濡れていたからこそ、早めにカッパを着るべきだったと反省した。